

今週の為替相場見通し(2021年2月15日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		104.41 ~ 105.67	104.93	104.30 ~ 105.70
ユーロ	(ドル)		1.2020 ~ 1.2149	1.2119	1.2000 ~ 1.2200
(1ユーロ=)	(円)		126.45 ~ 127.30	127.18	126.30 ~ 128.30
英ポンド	(ドル)		1.3680 ~ 1.3865	1.3852	1.3750 ~ 1.4000
(1英ポンド=)	(円)	*	144.04 ~ 145.48	145.47	144.50 ~ 147.50
豪ドル	(ドル)		0.7652 ~ 0.7772	0.7760	0.7650 ~ 0.7850
(1豪ドル=)	(円)	*	80.65 ~ 81.49	81.43	80.50 ~ 83.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第一チーム 逸見 久貴

(1)今週の予想レンジ: 104.30 ~ 105.70 円

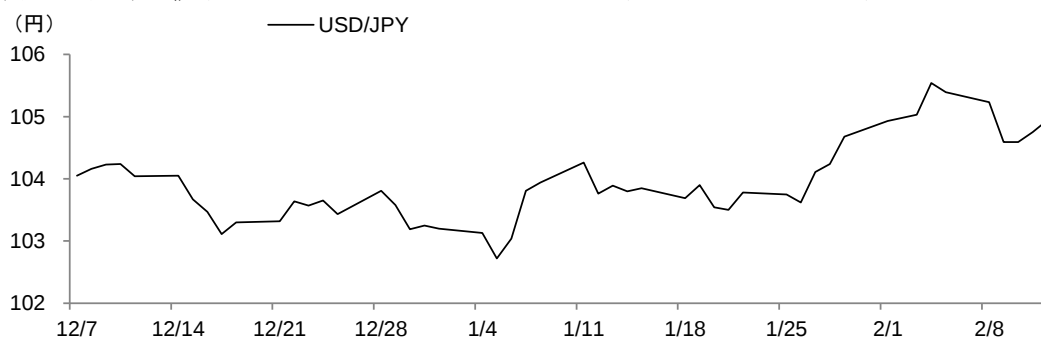
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円は下落した。週初は105.40円でオープン。米30年債利回りが約1年ぶりに2%をつけ、10年債は1.2%に迫る動きを横目にドル買い地合い優勢。ドル/円は、週高値105.67をつけた。一巡後は、米金利の上昇幅縮小を受け反落。結局、200日移動平均線(105.57)越えの水準で定着することができず、短期筋の見切り売りや米金利の低下によってドル売りが強まると、105円台を割り込む展開。10日の欧州時間には株式市場の下落もあいまって、週安値104.41をつけた。その後、日銀が3月の金融政策決定会合でマイナス金利の深堀りなどの追加緩和観測が高まると、円売り地合いとなり104円台後半まで反発。11日は本邦、中国が休日となる中、104円台半ば付近で動意乏しい展開。週末12日、米金利の上昇を受けて105円台前半まで上昇したものの、原油価格上昇を受けた資源国通貨買いが強まるとドル/円は上値の重い展開。翌週初(15日)が米国休場ということもあり、積極的な取引が控えられ、方向感なく推移。結局104.93円で越週した。

先週のドル/円は、米金利の上昇やドル売りポジションの解消によって200日移動平均線越えを試したものの、新規材料に欠ける中、この平均線に跳ね返された格好となっている。今週のドル/円は再び平均線越えを試す展開を予想する。バイデン新政権が提案した1.9兆ドル規模の経済対策案が上下両院で可決され、米景気回復への期待感が高まり易い状況下、堅調に推移する米金利がドル/円のサポート材料となろう。また、先週末の日銀追加緩和観測によって、本邦サイドからの円売り材料もある中、ドル/円は再度上昇していくと考える。平均線を確りと越えることが出来ればドル高トレンド入りもあり得るが、コロナに関する不透明感は依然として根強く、ワクチンの流布・有効性を判断している段階でポジションを一方に傾けることはリスクであり、先週見たように平均線付近にかけては上値の重い展開を想定している。

(3)先週までの相場の推移

先週(2/8~2/12)の値動き: 安値 104.41 円 高値 105.67 円 終値 104.93 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 営業第二チーム 甲斐 貴之

(1) 今週の予想レンジ: 1.2000 ~ 1.2200 126.30 ~ 128.30 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は上昇する展開。週初8日、1.20 台後半ばでオープンしたユーロ/ドルは、一時週安値となる1.2020 までじりじりと下落するも、米金利低下を背景にドル売りが強まると1.20 台後半まで反発。翌9日にかけても米金利低下を意識したドル売りにサポートされ、米株式市場がプラス圏に回復すると、リスク志向のドル売りが強まり、ユーロ/ドルは1.21 台前半まで上昇した。10 日もドル売り優勢地合いにユーロ/ドルは1.21 台半ば近辺まで強含む場面も見られたが、その後は上値重く1.21 台前半で揉み合い推移となった。11 日には、米金利がじりじりと低下する中、ドル売り優勢となり、ユーロ/ドルは一時週高値となる1.2149まで上昇したが、上値は重くその後は1.21 台前半まで反落した。12日のユーロ/ドルは再び1.20台後半に入る場面もあったが、米国時間には再び、1.21 台前半に戻して終えた。

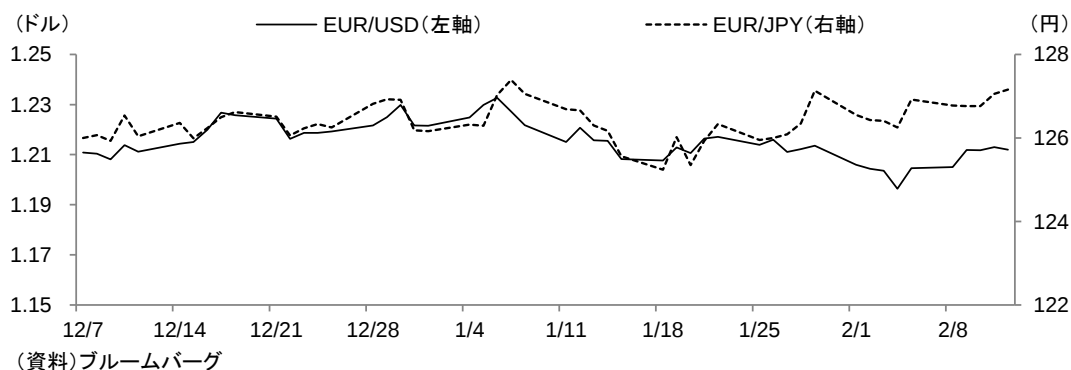
今週のユーロ/ドル相場は引き続き、上値の重い展開を予想する。先々週に大きく下げ1.20を割ったところから1.21台を回復し、今まで過剰に積みあがっていたユーロからドルへ戻す流れが一段落したように見えるものの、以前の水準まで戻すのは難しいように思われる。米の新規コロナ感染者数の減少・ワクチン接種者の増加が進む中、引き続きドル見直しの動きには留意したい。また、18日(木)にはFOMC議事要旨(1月会合分)が公表されることもあり、テーパリング議論の有無などに注目が集まる。議論がなければ、ドル売りが進展し、再び1.22を目指す展開か。逆に、テーパリングや利上げに関する議論があったのであれば、再び1.19台へとドル高が進む可能性には留意したい。今週は15日(月)にユーロ圏12月鉱工業生産、ユーロ圏12月貿易収支、16日(火)にユーロ圏10~12月期GDP(修正値)、19日にユーロ圏12月経常収支、ユーロ圏2月製造業/サービス業PMI(速報)が発表予定となっている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(2/8~2/12)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2020 高値 1.2149 終値 1.2119

(対円) 安値 126.45 高値 127.30 終値 127.18



3. 英ポンド

(1) 今週の予想レンジ: 1.3750 ~ 1.4000 144.50 ~ 147.50 円

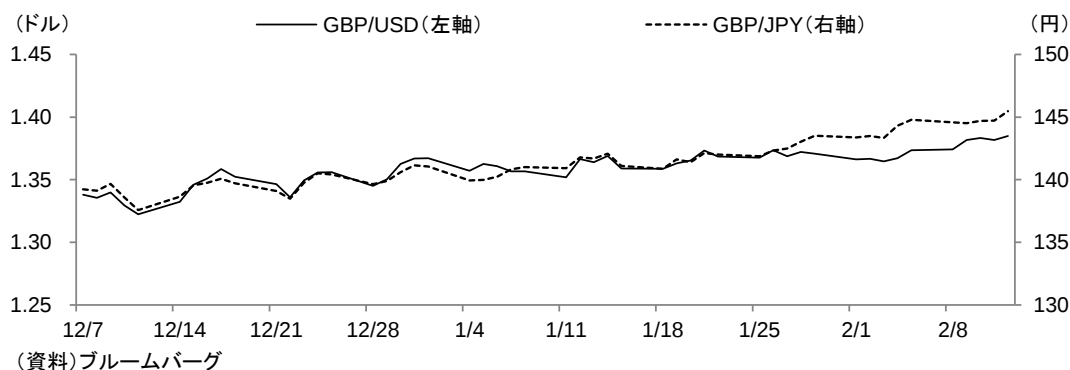
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、小幅ながらも、予想外の上昇。週前半、ポンドは対ドルで堅調推移を支配的としたが、これはドル安の裏返し。並行して、対円、対ユーロなどでは、ポンドは方向感に乏しい上下動を繰り返していた。ドル安は米長期金利の低下を背景としたようだが、10日に予定された米連銀パウエル議長の講演を前に、米国債市場は同議長が鳩派的な姿勢を堅持する可能性に期待、国債を買い上げたようだ(利回りは低下)。10日には、ポンドは対ドルで、18年4月来の高値を1.3865まで更新した。同議長は、予想通り、緩和的な金融政策の継続を約束すると同時に、雇用市場の回復のために財政政策を含む社会全体の取り組みが必要と強調。予想通りの鳩派的な姿勢を示したものの、その後、米国債は一転、下落に向かった(利回りは上昇)。ドルも底打ちから上昇に転じたが、ポンドが明確に水準を切り下げたのは、11日。同日、英中銀ベイリー総裁が、1月の取引実績を引き合いに、EUの金融規制に不満を漏らしたことが、EU離脱後(移行期間終了後)の英金融業界の先行き不安を強めたことが原因と思われる。英経済紙によると、1月の株式売買高は、欧州1位の座を、ロンドンがアムステルダムに譲ったという。また、米金融情報会社によると、同月のユーロ建金利スワップ取引シェアも、ロンドンからニューヨーク、及び大陸欧州の拠点到大幅に流出したという。こうした現状を踏まえ、同総裁は、EUの英に対する金融規制が理不尽であると訴えた。この前後、ポンドは対ユーロでも急落し、対円でも軟調、全面安の様相を見せたが、週引けを間近に、突然、全面高に転じた。同日米時間午後、発表された米シシガン大学の2月消費者景況感指数(暫定値)が市場予想を明確に下回り、ドルは全面安の様相を呈した。ただ、ポンド上昇は同指数の発表前から始まっており、対ドルに限らず全面高で、対円で145.48、対ユーロでも0.8744とそれぞれ週の高値を更新した。なんらかのポンド買い要因の存在が考えられたものの、残念ながら、はっきりした要因はつかめなかった。

今週の英ポンド相場は、もう一段の上振れを予想。ポンドは対円で145円水準を引っ掛け、対ドルで1.40、対ユーロで0.87といった心理的な節目水準を射程に入れている。英経済やポンドに強気になる要因は、引き続き思いつかないものの、どうやら通貨市場はこうした水準を試さないことには収まりがつかないように見える。先週末、週引けを控えた時間帯に、これといって目ぼしい要因も見当たらないまま、ポンドが全面高に振れた値動きにも、なにやら不気味なポンド買い圧力の存在を感じさせる。中期的には、しかしながら、引き続きポンド全面安を見込む。上述、欧州株式市場やユーロ建IRS市場におけるロンドンのシェア流出に関しては、金融規制に関するEUとの交渉はこれからでもあり、単月の数字を過度に深刻に受け止めるのは不適當、外国為替市場や国債/社債市場の規模と比較すれば、上述2市場の規模は限定的などといった楽観的な見方が既に聞かれる。それはその通りかも知れないが、コロナ禍で滞った物流とは一線を画し、金融取引にコロナの影響は限定的なはずで、その実績にはっきりとした変化が表れている以上、一過性の問題と看過するのは楽観が過ぎるように思われる。また、先週は、3月3日の予算発表を前に、スナク財務相が個人所得税控除の凍結という実質「増税」の導入を検討しているなどという報も聞かれた。先進国の中でも、英は、コロナ対策に相対的に大規模な財政出動をした国のひとつに挙げられる。英中銀の支援(国債購入)があつて可能になったことだが、いつまでも中銀の財政ファイナンスに頼った大盤振る舞いが続けられないのは自明なはず。英はコロナウイルスの接種でも先進国の先陣を切っているものの、漸く曙光が射し始めた景気回復期待に、増税観測が水を差すような展開は、ポンドも歓迎しないだろう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(2/8~2/12)の値動き: (対ドル) 安値 1.3680 高値 1.3865 終値 1.3852
(対円) 安値 144.04 高値 145.48 終値 145.47



4. 豪ドル

市場営業部 営業第二チーム 天雲 遊也

(1) 今週の予想レンジ: 0.7650 ~ 0.7850 80.50 ~ 83.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場はじりじりと上昇する展開。週初8日0.7679でオープンした豪ドルは、米30年債利回りが約1年ぶりに2%をつけるなど米金利が上昇する動きを横目にドル買いが進んだことで、豪ドルは下落し週安値である0.7652をつける。しかし、その後は米金利の上げ幅縮小からドル売りに転じ、豪ドルは0.7700を突破。9日は、アジア時間に発表された豪1月企業信頼感指数が市場予想を大きく上回ったほか、豪企業景況感指数は前月から低下するも、長期平均を上回る結果となったことが好感され、一時0.7740近辺まで上昇。しかし、株式相場の軟調さを受けて上値は重い展開となった。10日は、米1月CPIが前年比で弱含む結果にドル売りが強まり豪ドルは一時0.7760付近まで上昇するも、その後は利益確定の売りに押され0.77台前半まで下落。11日は、米失業保険新規申請数が市場予想ほど改善しなかったことを受けてドル売りが優勢となる中、豪ドルは週高値である0.7772をつける。しかし、この水準では売り圧力が強く、滞空時間も短く0.7750付近まで戻される。12日は、株式市場の軟調推移を背景にリスクオフ地合いとなり豪ドルは0.77台前半まで下落。しかし、原油価格の上昇を要因に0.7750付近まで値を戻し、0.7760で越週した。

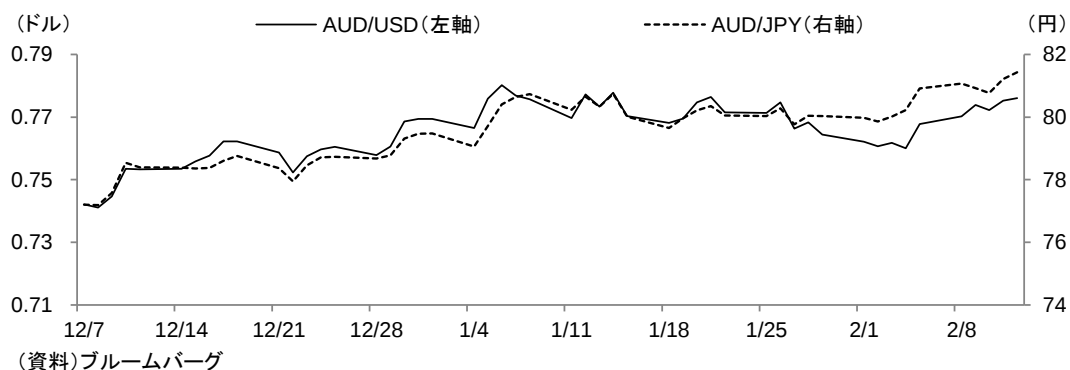
今週の豪ドル相場は堅調推移を予想。今週は16日(火)のRBA議事要旨、18日(木)の1月雇用統計、19日(金)の製造業・サービス業PMI、小売売上高が注目される。前回市場予想対比大幅に下回った小売売上高については、足元市場予想ではプラス2.0%への上昇が予想されており、予想通り堅調な内容となれば豪ドル買いが勢いづく可能性も想定したい。なお、ロウRBA総裁のゼロ金利政策への否定的発言も一定のサポート材料となろう。センチメントは楽観一色とはなり辛いですが、原油相場、株式相場が堅調推移となれば豪ドルは上昇傾向になるであろう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(2/8~2/12)の値動き:

(対ドル) 安値 0.7652 高値 0.7772 終値 0.7760

(対円) 安値 80.65 高値 81.49 終値 81.43



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。